

外来がん化学療法における薬局薬剤師の検査値に基づく高度薬学機能の発揮

早笋 奈美香¹⁾、緒形 富雄²⁾、伊藤 秀剛²⁾、岡本 怜子³⁾、佐藤 展宏⁴⁾、
永野 悠馬⁵⁾、前田 守⁵⁾、長谷川 佳孝⁵⁾、月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、
大石 美也⁵⁾

- 1)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 小牧市民病院前店
- 2)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 旭川医大店
- 3)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 行田店
- 4)(株)アインファーマシーズ
- 5)(株)アインホールディングス

【目的】 薬局薬剤師が高度薬学機能を発揮して外来がん化学療法に貢献するためには、能動的に患者情報を入手することが必須である。今回、当社グループの薬局プレアポイドを調査し、薬局薬剤師の検査値確認の重要性を検討した。

【方法】 当社グループが運営する保険薬局に所属する薬局薬剤師が 2018 年 12 月～2021 年 3 月に報告した薬局プレアポイドから、処方箋に記載された臨床検査値に基づいて薬局薬剤師ががん治療の副作用回避に貢献した代表的な事例を抽出した(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0096)。

【事例 1】 70 歳代女性患者がタモキシフェン錠 20mg/日の処方箋を持参した際、薬局薬剤師が処方箋に記載された検査値から肝機能悪化を確認した(AST(IU/L):前回 40、今回 122、ALT(IU/L):前回 35、今回 79、 γ GTP(IU/L):前回 52、今回 80)。当患者はウルソデオキシコール酸を併用しており、患者から「タモキシフェンは継続、ウルソデオキシコール酸は中止」との医師の指示を聴取した。検査値と医師による指示の相違を疑義照会し、「タモキシフェンは中止、ウルソデオキシコール酸は継続」が正しく、処方箋の誤発行が判明した。

【事例 2】 60 歳代女性が S-1 80mg/日の処方箋を持参した際、処方箋に記載された検査値から薬剤師が腎機能悪化を確認した(CCr 34.67 mL/min/1.73m²、eGFR 49.3 mL/min/1.73m²)。CTCAE の Grade1 相当の食欲不振も確認したため疑義照会を実施し、50mg/日へ減量された。

【考察】 提示した事例では、肝・腎機能の検査値をエビデンスとした疑義照会の実施が処方変更に至ったと考えられる。したがって、薬局薬剤師が検査値を確認することは、効果的かつ安全な外来がん化学療法を実現することに貢献すると考える。

(第 31 回医療薬学会年会(2021 年 10 月, Web)にて発表, 一部要約)